

(一般)

「子どもの話をしよう ～ユニバーサルデザインの学校づくり～」

大阪市立湯里小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

本校は、4年前から「ユニバーサルデザイン」を研究テーマに据えてきた。きっかけとなったのは、ディスレクシア（識字障がい）の子どもだった。学習意欲や自尊心が低くなっていたその子どもに対して、学校として適切な支援ができていなかった。そこで、校内で日々の指導のあり方を検討し、ユニバーサルデザインの視点（焦点化・視覚化・共有化）やインクルーシブ教育の観点からの授業づくりを続けた。この取り組みは一定の成果を得たが、学習面や生活面に「しんどさ」を持つ子どもたちは、他にも多くおり、みんなに適切な支援ができていたわけではなかった。子どもが抱える困難さを理解できず、「なまけ」や「わがまま」と捉えたり、「なぜ、みんなと同じようにできないのか」と責めたりする教員の姿があった。何より、子どもや保護者の「困り感」が増していく様子を知りながら、問題性を指摘できない組織の弱さが一番の課題であった。

こうした学校組織の課題を改善するために、次年度以降も「ユニバーサルデザイン」を研究テーマとすることを継続し、「子どもを理解する」という教員の基本的な資質の向上をめざしてきた。本年度の研究テーマは、「子どもの話をしよう～ユニバーサルデザインの学校づくり～」である。教職員の入れ替わりもあり、改めて子どもを理解し、授業づくりや環境づくりをしていくことを教育活動の柱とした。

2. 研究の趣旨

本校の研究の趣旨は、「子どもを理解すること」である。そして、「子どもを理解する」とは、「子どもから学ぶ」という意味である。本校が捉える「ユニバーサルデザイン」は、発達障がいの特性を持つ子どもたちだけではなく、本校に通うすべての子どもたちを対象にしている。「すべての子どもたちが『その子らしさ』を正しく理解され、安心して生活することができる学校」をめざしている。

そのためには、私たちがたくさん子どもの話をしなくてはならない。担任一人ではなく、関わる教職員がみんなで情報を共有する。うまく理解できないこともあるが、それでも「わがまま」と捉えずに、自分たちの言動にこそ問題はなかったのかを話し合う。授業づくりは、こうした土台の上に立つ教育実践の一つである。「ユニバーサルデザインの授業づくり」の視点をうい、教室に入れない子たちや、教室から出ていってしまう子どもたちへの支援策も考える。「環境整備」と「合理的配慮」のどちらも準備し、授業の中で子どもたちに「自分からアクセスできる力」を求め、主体性を育てていく。

「学校をつくる」「授業をつくる」という教育活動は、私たちが「学ぶ姿勢」を保てるかどうかにかかっている。それぞれのやり方に固執することなく、常に子どもの姿から「学校づくり」「授業づくり」を考えることができる教職員集団になることをめざしている。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 学級の全員を一斉指導できる担任（T1）の指導力の育成

視点② 特別支援学級担当や習熟度担当教員、特別支援教育サポーター、区教育活動サポーターなどの支援の在り方の検討

視点③ 積極的に意見交換することで支え合う、教職員のチームワークの構築

視点④ 「めざす子ども像」の確立

学級担任には、基本的な指導力として、学級の子どもたち全員にわかる内容と情報量で、指導や指示ができる力が求められる。「ユニバーサルデザイン」を研究テーマにしてからも、教職員間で指導の在り方の認識に違いがあった。学校として、「6年間で子どもたちにどんな力をつけたいのか」という目標が明確でなく、めざす方向性も定まらなかった。また、担任と特別支援学級担当、習熟度担当が、等しく責任を負い、同じ目線で話し合う組織づくりをしていく必要もあった。そこで、子どもたちの実態をもとにした具体的な教育目標を設定するため、研究推進委員会において検討を重ね、「自分の課題や特性をうけとめ、夢に向かって堂々と生きる子」という「めざす子ども像」を設定した。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- これまで明確でなかった「めざす子ども像」を、全教員で議論して作成することができた。これまで、それぞれの教員が感じてきた、本校の子どもたちの実態や自分たちの指導における課題を出し合い整理していく過程で、問題意識を共有した。6年間の教育実践の到達目標が定まったことで、研究授業の中だけではなく日々の授業においても、「どんな力を育てたいか」を意識して学習活動を設定できるようになった。
- 授業研究では、特性をもつ子どもたちの具体的な学習の様子と支援策を指導案の中に盛り込むことで、研究の視点を明確にすることができた。指導案検討会の段階から非常に活発な議論が行われ、「すべての子どもたちにとってわかりやすい授業とは何か」「本時の達成目標は何にすべきか」「わかりやすさと授業の質を落とさないこととのバランスはどう取るのか」といった「ユニバーサルデザインの授業づくり」における疑問点を話し合うことができた。また、しっかりと授業に向けての準備をしたことで、「ねらい」を持って本時の授業に取り組むことができ、授業者と参観者の双方が、子どもたちが一つの発問にどう反応するかを見ることができるようになった。
- 長年課題になっていた一斉授業に支援に入る教職員やサポーターの子どもへの関わり方に、統一性が見られるようになった。これは、特別支援教育コーディネーターが中心となり、それぞれの特性をもつ子どもたちに対して、どんな力を育まなくてはならないかを話し合ってきたことが大きく寄与していると思われる。さらに、そこで明らかになったことを職員会議や学年に関わる教職員にフィードバックして共有するケースが、昨年度までと比べて明らかに増えた。このことにより、すべての子どもたちに対して、学習課題を自力解決したり自分の考えを伝え合ったりする時間を保障する授業を、日々展開できるようになった。

このように、特別支援学級担当や習熟度担当の教員が、担任のサポートをするのではなく、対等な立場で意見交換をして必要な支援策を決めていく関係性になれたことは、研究の大きな成果であると考えている。

(2) 今後の課題

- 今年度の実践を継続し、「ユニバーサルデザインの学校づくり」として、生活・学習ルールの精選や校内環境の整備など、視覚的な支援を用いた新たな取り組みを進める
- 「めざす子ども像」の達成に向け、各学年や発達段階ごとの指導内容を検討し、具体化する。
- 「指導者のふり返し・セルフチェック」や、子どもの情報を共有するシステムを継続し発展させながら、教職員のチームワークをより確かなものにし、「子どもを理解する」という教職員の基本的な資質のさらなる向上に努める。